

六・本の各部の名称

ここで本格的な絵本作りに入る前に、よく使われる用語の説明をしておきます。

洋装本（ハードカバー）製本の名称

◆「表紙」と「背」と「みぞ」

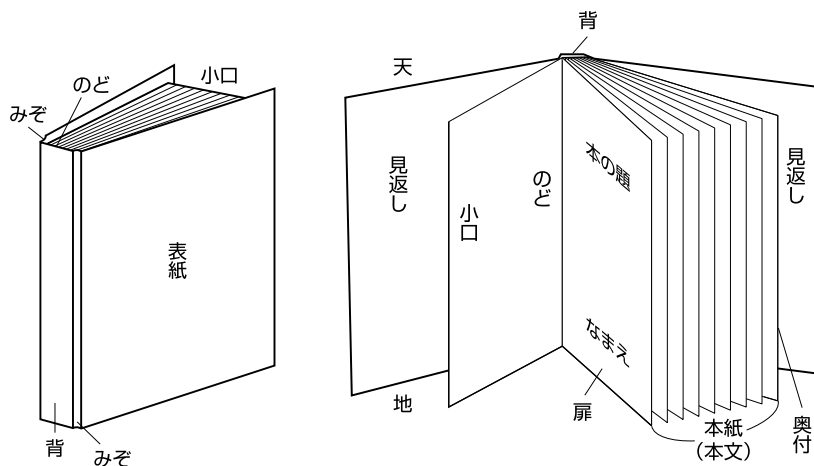
絵や文を書いた本紙を保護するためと、本の題名・作った人の名前を書くところです。ソフトカバーとハードカバーがあります。名のとおり表紙が柔らかいか、硬いかによって名称が決まります。このブックレットでは両方の作り方を紹介します。

ハードカバーの表紙には芯の厚紙とそれをカバーする色のきれいな丈夫な紙が必要で、制作手順が複雑になります。ミリ単位で紙の長さを測るので、小さな子どもがひとりで作るのは難しいです。

「表表紙」と「裏表紙」は二枚同じ大きさです。本紙の天から地の長さより六ミリ長くし、小口からのどの長さより二ミリ短くします。

本紙の文章を縦書きにするか横書きにするかによって、表表紙がどちらになるか考え、題名を書くように注意します。

「背」とは本紙の厚みに二ミリ加えた幅にし、長さは表紙と同じで、二枚の間



各部の名称

に置きます。この時、背と表紙の間にハミリの隙間をあけます。これを「みぞ」といいます。本紙のページを開きやすくするためです。

◆「本紙」あるいは「本文」

絵本は表紙と中身（絵と文が書いてある紙で、これを「本紙」あるいは「本文」という）からできています。文章が書いていない紙だけで絵本になります。

手作り絵本では、本紙の枚数は自分が必要なだけページ数を増やすことができます。本紙の大きさも手作りでは自由ですが、大きすぎると製本の時に苦労します。学生が個人で作る大きな絵本は、八つ切り画用紙を二つ折りにして作る絵本が作りやすいです。十年ほど前の学生たちは、共同制作で四つ切り画用紙くらいの大きい厚紙で『桃太郎』の大型仕掛け絵本を作ったことがありました（七十ページ参照）。しかし、紙がそりやすく、製本すると重くなりひとりひとりで開け閉めがしにくかったようです。学生の手作り絵本の本紙は、制作時間の関係で四枚から八枚までの枚数です。時には一枚の紙で作ることがあります。あるいは

は細長い紙をつなぎ合わせて一枚にして屏風畳みにして表紙に貼ることもできます（作り方は三十ページ参照）。

◆「扉」と「奥付」

扉には本の題名と作者の氏名を書きます。絵をそえるとなおよくなります。表紙のつぎに見返し、そのつぎが扉になるのが本式です。奥付は最後のページに本の題名、作者の氏名、出版した年月日、定価・仮の出版会社名を書きます。

◆「見返し」（表見返し・裏見返し）

見返しの紙は表紙と本紙を糊つけする役目をします。「表見返し」は扉の前、「裏見返し」は奥付のうしろへ糊つけします。

◆「天」と「地」

本の上の部分を「天」、下の部分を「地」といいます。

◆「のど」と「小口」

本紙を二つ折りにして輪になった方が「のど」です。二枚に開く方が「小口」です。